

MOT 勉強会レポート第 18 回

新著ブック・トーク

「ヘルスケア・イノベーションを巻き起こす」

2017 年 10 月 14 日(土) 開催

1. はじめに

「MOT 勉強会」2017 年度の 6 回目は、さる 10 月 14 日(土)、田町 CIC キャンパスイノベーションセンターの 2 階・多目的室 2 にて開催された。

講師は、学校法人東京農業大学・東京情報大学教授の松下博宣先生。

講演案内には、

「起業家でもある松下先生は、新たな本『医療看護イノベーション』をこの 9 月に出版されました。

今回のお話は、その内容からサービスイノベーション論を中心としてお話して頂きます。

ICT を含むサービス産業、MOT にご関心を持っている方に合っていると思われます。

ヘルスケアについてのホットな話題とサービス、イノベーションなど幅広い内容になると思います。」

と書かれていた。

松下先生は、昨年 4 月「ヘルスケア情報学」以来 1 年半ぶりのご登壇である。

私にとって、長寿時代における「第 3 の人生」モデルという視点を知ったのは、松下先生のこのときの講演が初めてであり、大いに感銘を受けた。またその 5 か月後にリンダ・グラットンの「Life Shift」が世に出てベストセラーとなったのは記憶に新しいが、その内容を見るにつけ、松下先生の着眼の先見性に敬服させられたものであった。

その松下先生が新著を出され、その内容についての講演ということで、これは是非とも聞き逃すまいという思いで聴講させていただきました。

また、松下先生には、是非リンダ・グラットンとの関係をお聞きしたいと、ミーハーな好奇心も手伝って、ワクワクした気持ちで懇親会にも参加させていただきました。

2. 講演概要

事前の配布資料はなく、講演はプロジェクタから投影したパワーポイントを使って進められ、先生の新著「医療看護イノベーション: 組織に変化を起こす2035年生き残り戦略の教科書」のページを適宜参照するという形ですすめられた。

開催時間3時間のうち講演時間枠は質疑応答を含め2時間半程であった。

2-1. 書籍「医療介護イノベーション」の目次

先述の通り講演は、先生曰く「書籍の中身をつまみ食いの的に選んで」進行していたこともあり、その内容をより正確に把握する一助として、書籍の目次を以下掲載する。

- 序章 長い前置きに代えて
- 第1章 サービス・サイエンスとサービス・イノベーション
- 第2章 自分をちょっと変える：自分イノベーション
- 第3章 イノベーションと越境型知性
- 第4章 サービスをイノベートする
- 第5章 ヘルスケアサービス・イノベーションを俯瞰する
- 第6章 ヘルスケアサービス・エコシステム
- 第7章 システミック・デザイン思考を身に付ける
- 第8章 共創のための実践ツールボックス

本書は、松下先生の博士論文「ヘルスケアサービスの価値共創とイノベーションに関する位相転換アプローチ」をベースに書かれている。

2-2. 7つのレンズと3つの構え

「7つのレンズ」(本書15頁)とは、複雑な研究対象を読み解くためのツールのようなもので、レンズに譬えているが、「システム」、「アクターとしての人間」、「複雑な相互作用」、「進化」、「階層性」、「情報」、「サービス」である。

「構え」とは、本書を書くにあたっての先生の姿勢・スタンスのようなものであり、実践者、ホーリズム、価値の共創の三つが挙げられたていた。

(1) 実践者としての構え

現象としてのイノベーションを、外側から観察者として傍観するのではなく、個人の自分事としてとらえようとする構えである。

「自分と対峙する格好で社会なり組織なりがまとまっているという構え」ともおっしゃっていた。

一方で、科学的態度としては観察者として現象を傍観することの方がより客観的と捉えられる。しかし、著書の中ではあえてそういった傍観者的な態度をとらずに、実践者としての立場を重視している。

また、自身の人生イノベーションと対峙するヘルスケアイノベーションの双方に重なる、橋渡しとしての超越型知性の立場と言えよう。

(2) ホーリズムの構え

ヘルスケアシステムを階層構造としてとらえる構えである。

書籍の139頁以降に詳説されている。

ヘルスケアを公共的な性格を有するものとしてとらえ、その理論的基礎に経済学者宇沢弘文の「**社会的共通資本**」を据え、その上層に松下先生が独自に提唱する**社会的共通健康サービス**が階層構造となって構築されている。

この階層構造の下層である**社会的共通健康資本**の最下層は地球生態系であるエコシステム・サービスにまで拡張している。

(3) 「価値の共創」という構え

「人は常に**価値の共創者**」であり、価値は「提案」しているにすぎず、価値の受益者である相手はその価値を主観的に決めるとする構えである。

書籍では、95頁以降「**サービス・ドミナント・ロジック**」で詳説されている考え方である。

対極的な価値定義に「マルクス労働価値説」があり、こちらはサプライサイドの発想である。

「バリューチェーン」におけるバリューも、価値は工場で労働によって作られるとしているので、サプライサイド発想である。松下先生は直接、提唱者のマイケルポーターに質問したことがあったそうで、「マルクス労働価値説の価値概念と同じ」と回答を得たとのことであった。

2-3. 「第2章 自分をちょっと変える:自分イノベーション」関連

自身の身近なところからイノベーションを起こすことができない者に、組織や社会をイノベーションを導くことはできないというのが、この本の主張であり、2章で自分イノベーションとして触れられている。

講演では、2章の内容の一部紹介として、近代に入って伸び続けた平均寿命と、その結果長寿化がもたらした**長寿ボーナス**について解説があり。そこからリンダ・グラットンの著書 **LIFE SHIFT** で提唱された長寿化時代の新しい人生モデルについての解説があった。

LIFE SHIFT で提唱されたマルチステージの考え方は、**複線多段階人生デザイン**として再定義され、**越境型知性**という松下先生の構えに繋がっていく。

長寿化時代については、昨年4月の当勉強会での松下先生の講演でも、古代インドの**死生観**と**健康寿命**の統計をベースにした「(長寿ボーナス)**10万時間**と新たな**第三の人生モデル**」が紹介されていたが、今回はそこに人生の全期間にわたる生き方モデルとしての考察が**増強**されていた。

例えば、講演の前段で自己紹介とともに語られる松下先生の波乱に飛んだプロフィールも、大学時代から自転車での世界探検期、コンサルティング会社就職期、アントレプレナーとしての起業・経営時代、東京農工大学での教育・研究時代などが、合間に学校での学びを挟みつつ、現職にいたるまでが、「**越境**」をキーワードにして、**複線多段階人生デザインの実験事例**としてまとめられていた。

講演では触れられていなかったが、この章では「**ポジティブ心理学**」や「**社会性資産**」についても言及しており、それを読むとリンダ・グラットンの **LIFE SHIFT** での**資産概念**と人の**幸福感**や**健康増進**、ひいては**長寿化社会**を生き抜く**知恵**との関係がより深く理解できたように感じた。

2-4. 「第3章 イノベーションと越境型知性」関連

本章では、サービスイノベーションの人的側面に焦点を当てて、**関係性スキル**をキーワードにして、越境型知性とイノベーションの担い手となるイノベータとの関係を明らかにしている。

講演では、マクレランドのコンピテンシーモデルと、ハイ・パフォーマンスのコンピテンシー調査プロジェクト、そしてその研究から定量化されたハイ・パフォーマンスの**技術スキル**と**関係性スキル**の特徴の説明。

そして「**異界文脈越境による文脈価値転換メタモデル**」を使って、越境型知性のアクターへの介入の振る舞いが紹介された。

2-5. 「第4章 サービスをイノベートする」関連

本章では、ヘルスケアサービス・イノベーションを俯瞰する前に、**サービスとイノベーション**という用語の意味と、その語の背後にある学術的系譜をレビューしている。

サービスについては、**サービス・ドミナント・ロジック**を元にサービスの特性をとらえ、**サービス・エコシステム**という考え方で身の回りや先進国のイノベーション政策を描写している。

また、イノベーションについては、**創造性**や**技術革新**、**改善**、**インベンション(発明)**といった諸概念との関係にまつわる議論を紹介し、イノベーションの過程をシステムとしてとらえる見方を示している。

そして、サービスとイノベーションが、サービス・エコシステムの中でいかに関わるかを示し、**改善**や**オープン・イノベーション**を通じてイノベーションを起こすことの大切は説いている。

講演では、「**インベンションとイノベーション**」(110頁)の表を元に、イノベーションの特性について説明があった。

2-6. 「第5章 ヘルスケア・サービス・イノベーション」関連

前章までにサイエンスとしてのサービス、そしてイノベーションが詳細に考察された後、本章ではいよいよヘルスケア・サービス・イノベーションの核心に迫っている。

3つの構えの一つ「ホーリズムの構え」や7つのレンズの一つ「階層性」でも触れたように、松下先生独自の階層分類で複雑で多岐にわたるヘルスケア・サービス分野のイノベーションを俯瞰している。

講演では、イノベーション事例として、

- ・プラットフォーム層における Sense.ly のバーチャルナース(146 頁)
- ・サービス層における
 - 人工物を利用する各種サービス(154 頁)
 - 「近赤外線免疫治療法」(156 頁)
- ・人間層では、あの世や霊魂を前提としたサービスのありようとして、イタコの「口寄せ」スピリチュアルサービスが紹介された。

2-7. 「第6章 ヘルスケアサービス・エコシステム」関連

前章で、ヘルスケア・サービスを階層性の視点で俯瞰してきたが、ここではエコシステムとして再定義している。

エコシステムとして再定義したすることで、読者がヘルスケアサービス・エコシステムのいずれの立場でどのように関わり、またイノベーションをどのように進めていくかを考えていく助けとなる。

ヘルスケアサービス・エコシステムの具体例として、厚生労働省が公表する「地域包括ケアシステム」を上げている。

また、日本のヘルスケアサービス・エコシステムを日本資本主義経済の発展と重ね合わせて理解し、システムが抱える課題や、その進むべき未来・方向性についても言及している。

日本の既存のヘルスケアサービス・エコシステムは、日本の資本主義が元気だった頃に築き上げられたものであり、現在は機能不全に陥っている。それは、日本の高齢化倍化年数が世界に類例のない急激なスピードで進行し、超高齢社会に変化している中で、既存のエコシステムが病院施設におけるキュアを主軸としたシステムであったことに起因している。

ヘルスケアサービス・エコシステムの現場では、キュアからケアへのシフトが進行している。

本書ではキュア・ケアシフトという流れの中でヘルスケア・イノベーションが進行すると説き、その死生観にまで考察が及ぶ。

講演では、ヘルスケアサービスシステムのケアシフト(本書 150 頁、177 頁)と、キュアとケアの相違を、「キュアとケアの連続線」(179 頁)と「科学的であることと人間的であること」(179 頁)の図表を使って解説していただいた。

2-8. イノベータが実践で参考にできるツールとしての第 7 章・8 章

第 7 章では、仕組みやサービスシステムをデザインするための方法論としてシステムミック・デザイン思考を詳説している。

システムミック・デザインは、「システムミック」と「デザイン」の組みあわせで、特に前の語は「システム」でも「システムティック」でもなく敢えて「システムミック」としているのは特別な含意があるためである。

第 8 章では、共創のための実践ツールとして 10 種が詳説されている。

講演では実践ツールからバックキャスト思考(237 頁)などが紹介されていた。

いずれも、現場ですぐに使って見たくなるような方法論とツール群である。

所感

1. 「いかに生きるか」と「いかに死ぬか」

冒頭にも述べたが、昨年 4 月に聴講した松下先生の講演と LIFE SHIFT のテーマの取り上げ方が似ていたこと、逆にその主眼とする視座の違いなどがこの一年近くずっと気になっていた。また松下先生とリンダ・グラットンとの関係などもお聞きしてみたいと思っていた。

まず視座の違いであるが、私が感じていた通り、「LIFE SHIFT が『いかに生きるか』であるのに対し、先生の昨年の講義は『いかに死ぬか』」にあった。

また、酔いのまわった懇親会の席でお聞きした話ではあるが、先生は付け加えて、「リンダ・グラットンはヘルスケア領域についての記述が少ない」とも回答されていたが、これもまた然りと思った。

因みに、松下先生は学会などの場で、2 度、リンダグラットンと直接意見交換をしたこともあったそうだ。

監修 加藤美治、執筆 石垣純